

# 東アジアの中の中国・韓国・日本

—— 引揚げを題材として ——

## China, Korea, Japan in the East Asia

— As the Subject to the Pullout —

全 京 秀\*

Kyung-soo Chun

### 1. 東アジアの広がりて考える

こんにちは、全京秀です。今聞いていただいた歌は昭和7年小林千代子の歌った「涙の渡り鳥」です。日本への引き揚げの時、大勢の人が歌った歌だと思います。実は、私が日本人類学史の勉強をする途中に憧れた人に東京大学文化人類学研究室の泉靖一という人がいます。その人が当時の満州張家口（現在は中国内モンゴル）から京城まで引き揚げする時に列車の中で酔っぱらって歌った歌なのです。昭和20年8月15日のことです。この歌を探すことが大変でした。戦後、この歌が3人の歌手にリメイクされています。大体70歳代の人々はよく知っていました。

今日のテーマは引き揚げについてです。スライドNo.1 をごらんください。対象地域の地図とThe Cincinnati Postという新聞の8月14日の記事です。日本の政府が直接アメリカとかイギリスに連絡出来ないで、永世中立国のスイスに仲介を頼んだという記事の内容です。私たちが負けたことを認める意志を向こう側に伝えて下さいとスイスに頼んだという新聞記事なのです。

今日の一つのキーワードが東アジアです。今から70年前は東アジアという言葉はなかった。その時の言葉は大東亜共栄圏でしたが、それが1945年8月15日に終わったのです。これが終わって、その後の問題なのです。NHKの朝の連続ドラマ、「おひさま」をやっていますが、先週陽子ちゃんの旦那さんが軍人で、戦地から戻りました。それを復員という。軍人、兵隊さんたちは復員したのです。でも民間の人たちは引揚者です。その引揚者の数は復員した兵隊の数も含めて670万人なのです。この人たちが海外の占領地から内地の方へ戻った。その間どのようなことが起こったかを今日ここで話したいと思います。



Slide 1

\* ソウル大学校社会科学大学人類学科教授 ph.D. (Department of Anthropology, Seoul National University)

このスライドNo.2の左側に載せている写真集は戦後の福岡の写真集です。アメリカ軍が撮ったものです。下の写真はちょうど福岡の天神あたりです。3月11日に起こった東北地方の地震の津波で流された場所と全く同じです。こんなつらい時期があったのです。このことに対して今はもうほとんど忘れていて、引揚者の人たちも、今は80何歳になっていて、もう話したくない。理由は今まで自分たちが引揚者という一つの言葉で差別された。だから話したくない。これが今も同じストラクチャーに入るんだと思う。何か問題があれば、それに対してちゃんと考えて検証して研究して、次の段階で何かあれば対策を準備する。そうではなくて忘れたいで済ませてしまうと、次に大きなことが起こった場合も公式がない。その意味でも今日の話をするのが大切だと思います。

## 2、敗戦後のシステム

戦争が終わった後も戦前からの大日本帝国のシステムはなくなった訳ではない、システムの問題なのです。その8月15日後もこの帝国システムは動いた。それで海軍省が前の占領地である中国、朝鮮に対して、それまでの帝国システムを使って様々な情報を集め、分析して、次の段階の対策を準備したのです。



Slide 2

それは全部秘密になった。今考えるのは、秘密にせず公開して全部が分かるようになっていけばもっと良かったのではないかということです。政府側はいつも隠します。このスライドNo.3は戦後の海軍省の報告書です。

もう一つの大きなパワーがアメリカでした。連合軍といってもほとんどがアメリカ軍です。GHQ, General Head Quarters, マッカーサー軍政府が日本に置かれましたが、その時、マッカーサー軍政府の下で、アメリカの人類学者たち何人かが、日系人も含めて、日本の占領についての研究を行いました。スライドNo.4の左側の人物はジョン・ベネットという、セントルイスにあるワシントン・ユニバーシティの人類学科の教授でした。4年前に亡くなりました。この先生も私も元々人類学の中の生態人類学、これは環境と文化の関係を研究することを専門としています。同じ専門分野でしたからジョン・ベネット先生をよく知っているのです。しかし、ちょうど5年前に私がこの問題に着目して初めてジョン・ベネット先生がマッカーサーの下で働いていたことを知りました。それを知って連絡したら自分が持っている資料を整理途中でした。ジョン・ベネット先生はこの資料を Photography and Social Research in the allied Occupation of Japan, 1948, 1949, 1951 という本としてまとめ完成させ、半年後に亡



Slide 3

くなりました。この内容はまだ発表されていないものでした。スライドNo.4の右側は東京高島屋デパートです。看板が「東京PX」と書いてある。PXというのは軍の管理下にあるスーパーマーケットです。高島屋がPXとされたのは一つのシンボリックな意味があります。一般人が普通使用する百貨店もGHQの管理下にあるという意味です。

だからアメリカのGHQで活動しても、背後に日本の海軍省の動きがある。このスライドNo.5を見て下さい。この3枚の後ろにある書類は報告書です。東京大学で文化人類学講座の最初の主任教授だった石田英一郎という人がいます。もともとマルキストで戦前ウィーン大学に留学し人類学、民族学を研究した人です。アメリカのGHQがこの人を捕まえて利用するかどうかをちゃんと調べた、その報告書なのです。彼は若いときはファシストだったけれども、今、彼の思想は大丈夫だと書かれています。だからGHQの下でジョン・ベネットと一緒に働いたのです。

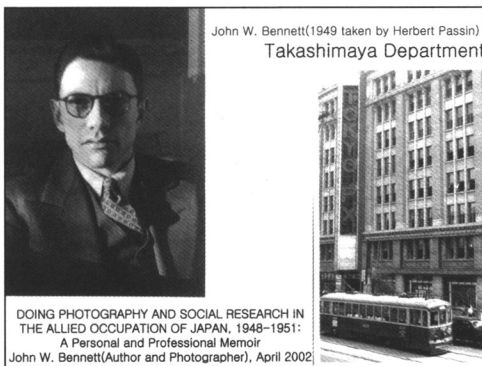
朝鮮半島、中国から民間の人たちが船に乗って内地の方へ戻る際の引揚げ港がありました。山口県の仙崎港も引揚げ港の一つでした。長門市の仙崎駅がありますが、その仙崎駅の中に観光案内所があり、その一部に引揚げの時の資料が並んでいました。仙崎港へは約40万人が釜山から帰りました。仙崎港から

は30万人くらいの人たちが釜山、韓国の方に戻りました。ですから1945、46、47年の2年半の間で70万人の人たちがあの小さい港を利用したのです。もっと大きい引揚げ港は博多でした。山口県では下関港が仙崎港より大きい港でしたが下関港には機雷が残っており船が入ることが出来なかったのです。博多港の方は2年半の間で130万人が韓国の釜山、中国の葫蘆島から戻ってきました。

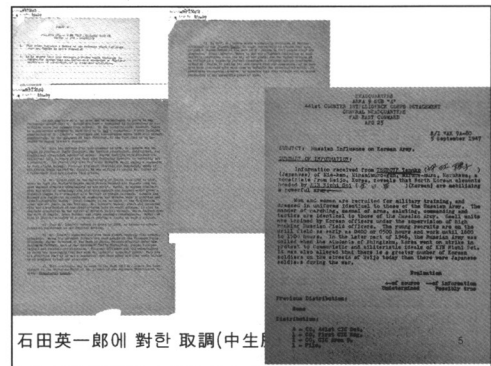
引揚げをするとき、米軍の諜報機関CICが引揚げをする人たちの持っている情報を調べます。すべての引揚者ではなくて選択して取り調べるのです。取り調べの報告書も現在たくさん残っています。これらの引揚げ関係資料は福岡の社会福祉施設にあります。その施設に奇跡的に残っていたのです。そこで私は半年間資料を整理しました。

### 3、泉靖一という人類学者

前に言った日本の外務省、当時は在外邦人部という名称でしたが、どれくらい大陸の方と連絡したのか。どのルートを使ってそれが出来たのか。その証拠として東北調査部という組織があったようです。この東北調査部は、国立国会図書館にいて関係者の人たちに聞いたことですが、正式な外務省の組織ではありません。外務省組織の中にはその名



Slide 4



石田英一郎 対 取調 (中生)

Slide 5

前がありませんでした。探したらこれが秘密に書いてある。このスライドNo.6を見て下さい。左側の手紙の封筒に北田と書いてありますが、これも秘密の名前です。この手紙を引揚げる人にこれを博多の泉靖一に渡して下さいと頼むのです。この泉靖一という人について今日私がお話をします。

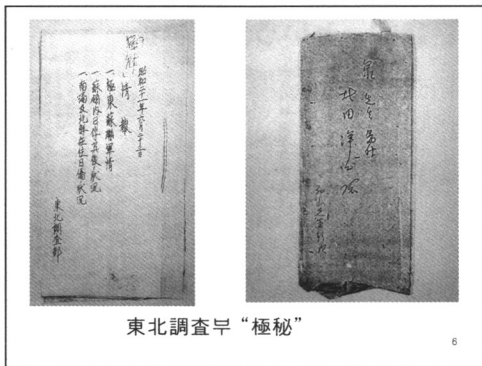
今日では泉靖一は人類学者、文化人類学者として知られています。この人が引揚げの時、秘密諜報員の役割を持っていたことは今まで全く知られていなかった。事実彼は行動しています。このスライドNo.7は泉靖一が中国からもらった手紙なのです。この文書は8月15日以後に出されたものですが、外務省大陸課中川という名前が出てきます。中川とは戦後の1950年代外務省の韓国との外交関係部署の局長をやった中川 融です。中川が課長任務をもって泉靖一と連絡をする。何が必要

で誰と連絡を取っていたかと。秘密裏に敗戦前の帝国システムが動いていたことが分かります。

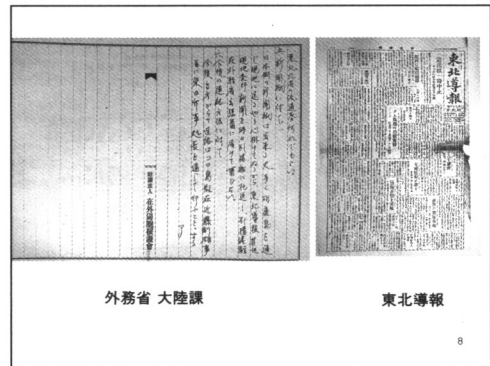
#### 4、京城日本人世話会

スライドNo.8は中国で1946・1947年に出された新聞です。

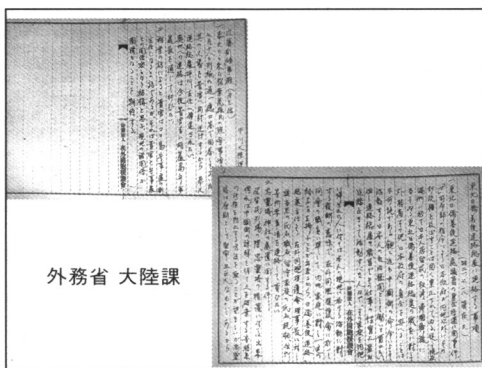
スライドNo.9は昭和20年9月1日から120日間、つまり12月末まで京城で出された京城内地人世話会会報という資料です。120枚が出版されました。最初は京城内地人世話会の名称でした。戦前の植民地時代は自分たちのことを内地人とは呼ばなかったが、戦後になると内地人というようになります。また、発刊12日以後はさらに内地人世話会は日本人世話会と名前を変えます。これを毎日一枚ずつ以前の京城日報の社長だった人が責任をもつ



Slide 6



Slide 8



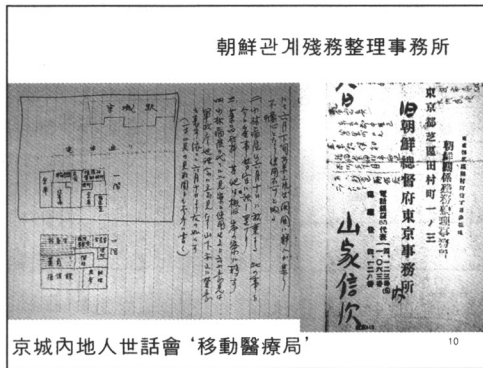
Slide 7



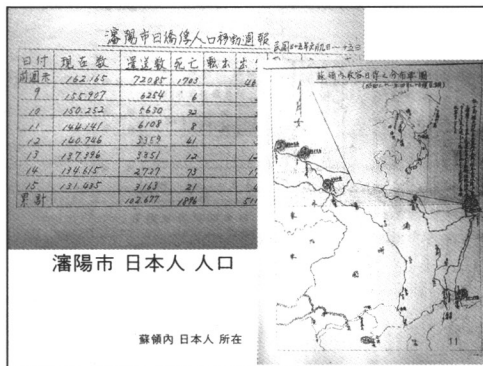
Slide 9

て出版したのです。この120枚が奇跡的に残ったのです。引揚げ者が釜山から船に乗る時にリュックサックを一つずつ配られます。小さなリュックサックの中に自分が必要なものだけを入れて、それ以外は持って帰れない。そのリュックサックの中に誰かがあの120枚を入れて持ち帰ったのです。だから奇跡的なのです。

戦争が終わった後も朝鮮総督府東京事務所の仕事は残っていました。引揚げ時のいろいろな調整があったのですが、その資料がこのスライドNo.10、左側のもので。右側は現在のソウル市内ソウル駅の前、OPDという大きなビルディングがあります。その横に南大門警察署がありますが、その辺りだと思います。そこに小林病院がありました。その4階建ての病院の建物を使って京城内地人世話会の一組織として移動医療局が作られました。



Slide 10



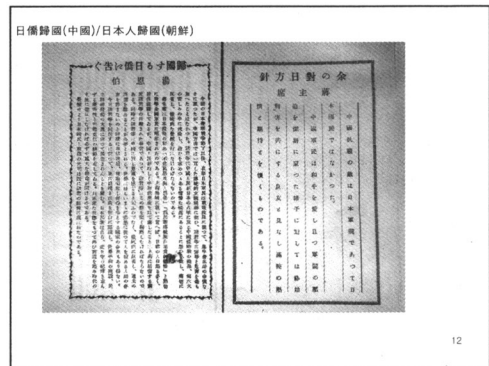
Slide 11

た。引揚げは夏から冬にかけて行われました。その移動の途中にコレラとかペストなどの病気だとか、体の衰弱や、栄養問題もたくさん起こりました。子供も多数死亡しました。この医療問題に対処する為にMRU, Medical Relief Unionを作りました。移動医療局のことです。MRUは米軍政府の許可をもらって薬品も米軍から提供してもらい、お医者さんもきました。その医師たちはほとんどが京城帝国大学医学部の先生と生徒たちでした。

### 5、様々な引揚げ

こんな情報もあります。民国15年ですから、1946年のことです。その時期に瀋陽の方に日本人がどれくらいいるかの人口をチェックします。その人口情報もたくさんあります。スライドNo.11の左側は旧ソ連に今残っている日本人がどれくらいいるかの情報もちゃんと集めて、情報を守る。そしてその情報を foreign affairs 省の東北調査部が博多の泉靖一を経由して外務省の中川課長に渡す。そのルートがありました。

こんな文書もありました。蒋介石が前面に立って、スライドNo.12の左側ですが、私たち中国人はあなたたち日本人には悪い感情は全然持っていない。あなたたちを利用した軍閥という当時の軍のトップに対してはありま



Slide 12

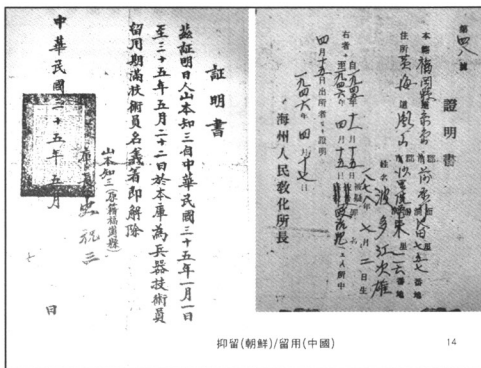
す。それに対して問題であって、現在の敗戦にあたっては、私たちはあなたたちを安全にさせる為にここにいろいろな施設設備を準備するという命令書がありました。

こんな写真も残っていました。スライドNo,13の左側です。日本の兵士がお世話になった中国の一つの家族との分かれの場面です。つらい感情もありました。その右側は朝鮮 student soldier 学兵同盟という組織です。これは戦前日本軍に徴用された朝鮮人たちが、韓国に戻った後作った組織なのです。彼たちがお金を集めて日本人世話会に寄付するのです。これまで、話してきたように引揚げという枠組みの中にいろいろな人間生活の情報があるのです。

スライドNo,14の右側は北朝鮮の海州という場所であった一つの事件です。そこでは植民地時代、地方の公務員をやった日本人を敗



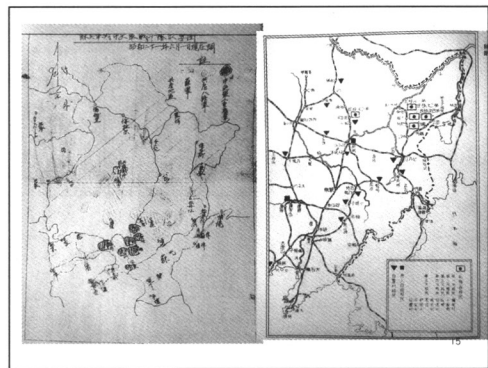
Slide 13



Slide 14

戦後政治犯にしています。日本人は矯導所に収容されました。スライドの左側は、これが朝鮮と台湾の戦後の問題の一つだと思うのですが、台湾の方は戦後全部の人が引揚げをしたのではなくて、一部は3年くらい留用されました。例えば日本人のプロフェッショナルの人たちが留用されて、そのまま植民地時代のところをうまく整理して、次の中華民國の政府に引き渡す。この役割を留用された人たちが担っていました。留用したことの良い例は今の台湾大学です。昔の台北帝国大学、それを敗戦になってそのまま昔の先生たちもその知り合いも一緒になって、ちゃんと整理して次に大陸から来た先生たちにちゃんと渡す。今の台湾大学に入ったら、昔の建物も昔の博物館も、博物館の収蔵品もそのまま綺麗に残っている。だから台湾と朝鮮と、戦後の日本に対して外交問題とかいろいろなことに違う差が出てきているのではないかと思います。引揚げる時にこっちに問題がありました。このスライドNo,15は東北調査部がソ連軍、極東軍の動きについてちゃんと調べて、その情報を整理しています。上海の国民党軍と共産党の軍、それを中国の中に配置したのです。特に満州の方はソ連軍もいるし、共産党軍もいるし、上海の蒋介石国民党軍もいるし、複雑な状況をみんな地図にしています。

もう一つの問題は引揚げルートのごとで



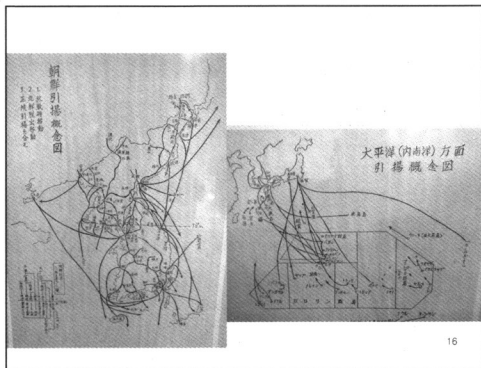
Slide 15

す。スライドNo,16の左側の地図は東南アジアの海側は朝鮮半島からの引揚げルートなのです。次のスライドNo,17の左側は上海からビルマあたりの引揚げを示した地図です。この情報は仙崎に多くありました。右側の地図はニューギニアからの引揚げを示しています。ニューギニアの地名ではなくてオーストリア北方という書き方になっています。理由はオーストリアまで全部占領する作戦があったのです。だからニューギニアからではなくてオーストリア北方から引揚げすると書いてあるのです。

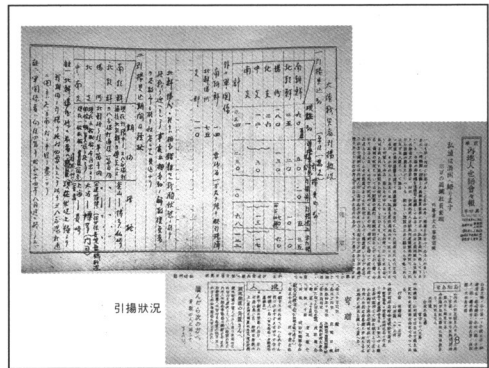
これも中間報告ですけど、スライドNo,18の左側はいつ頃どの地域からどれくらいの引揚者が日本に帰ってきたかを示しています。同じスライドNo,18の右側、後ろに載っている内地人は満鉄の人たちです。満鉄という組織は戦前、日本米国の中で一番大きな会

社ですけども、パワーの一番大きい人、関東軍との関係も一番強い人で満州を占用した会社です。その満鉄の人々の一部が京城まで引揚げして、次に博多に戻るのですけれど、京城に入ったその段階で彼たちはこれから日本に帰国したら、職場もないし、仕事も無いどうすればいいのか。もともとの満鉄に戻りましょうという動きもありました。満鉄の組織を担った人々が戦後日本の政治にも入ってきます。

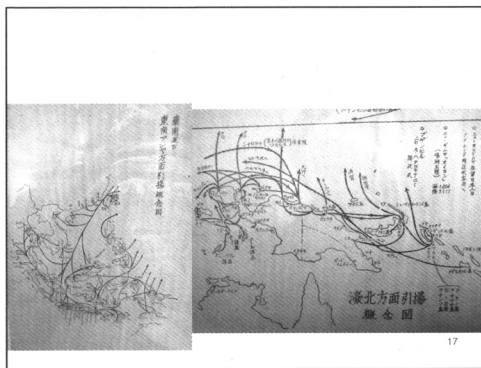
その引揚げの時、管理する人たちが悩んでいた問題は北朝鮮でした。スライドNo,19を見てください。北朝鮮に抑留されている日本人をどう、道を作って南朝鮮まで引揚げをするか、それは一つの課題でした。それで、今どこに何人いるかという事実で38度線が出来たのです。38度線のどこまで行ってどの道を作って南の方に帰国して下さいと、それを全



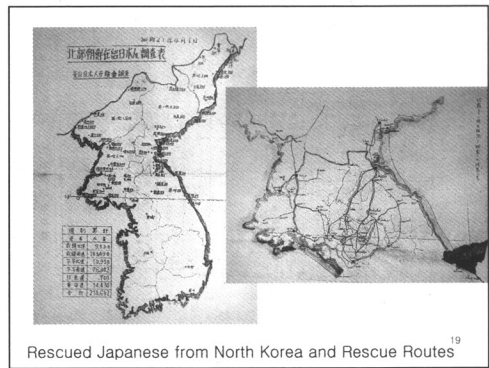
Slide 16



Slide 18

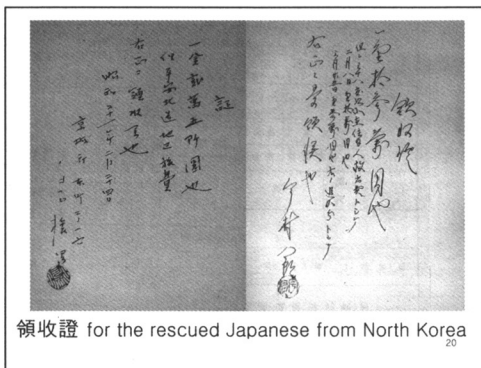


Slide 17

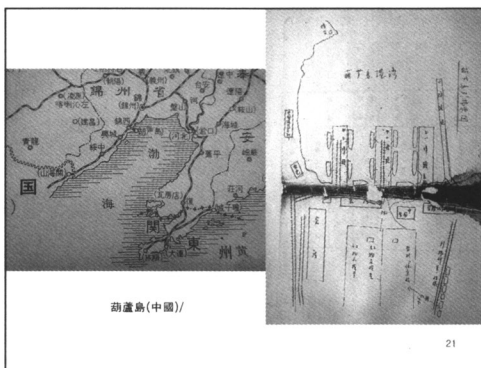


Slide 19

部管理するのがこの人泉靖一なんです。すごいことです。その時の歳は丁度30歳です。考えられますか30歳、今の30歳と比べてみてください。大陸を全部見て、こっちは博多に座って、全部米軍の管理下でしたからソ連軍と交渉が出来ないものですから、でも秘密裏に自分なりの諜報員を作って、中国まで密航させて情報もらい、写真まで撮っています。自分自身も密航して満州の日本人が持っていたお金を集め、このままでは紙くずになってしまうのでその前に行って換金しようとしています。2回目に密航する時に米軍につかまります。次には諜報員を作って、南から北の方に諜報員を送ります。その人が案内人になって北朝鮮の日本人は安全に帰ることができます。このスライドNo.20はその経費、領収書なのです。スライドNo.21は中国、満州地域の引揚げが行われた葫蘆島の港の施設です。



Slide 20



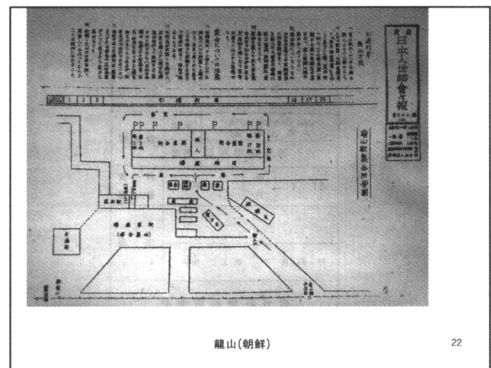
Slide 21

スライドNo.22は京城の引揚げ出発地で龍山駅というところです。今は非常に良く整備された大きな駅となっています。米軍が管理していましたが、実際の仕事は日本人世話会が前に立って行いました。

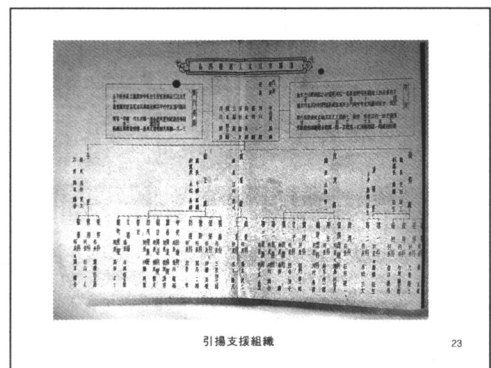
このスライドNo.23は中国側も引揚者のための組織を作った、その組織表です。

## 6、京城MRUの活動

このスライドNo.24は先に私が説明したリュックサックです。このリュックサックは私が江戸東京博物館で撮影したものです。右側がこの引揚者の証明書です。この証明書を持って食物の配給やお金をもらったのです。この小さいリュックサック一つに個人が必要なものを入れるのです。その中に京城日本人世話会の会報が入ったかどうかです。



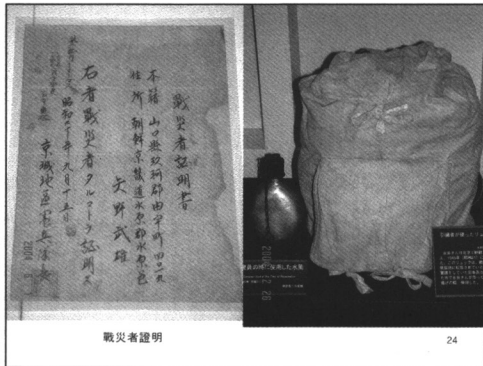
Slide 22



Slide 23



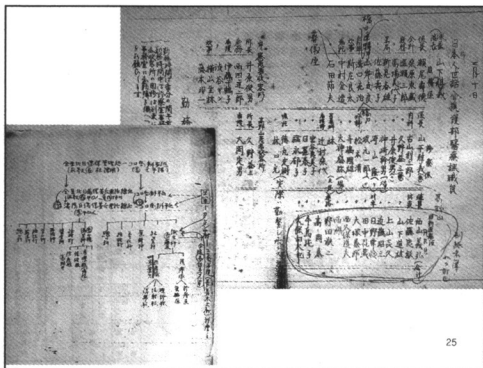
このスライドNo.25は京城で作られたMRUの組織です。引揚者の中の患者さんの名前で作った組織ですが、その内容もどんどん変わります。スライドNo.26の表ですが、この組織の医療チームはほとんどが京城帝国大学の人でした。ここが重要なところ。後ろはMRU病院列車はいつ列車が発車するよとの連絡文です。列車には朝鮮人も一人責任者が



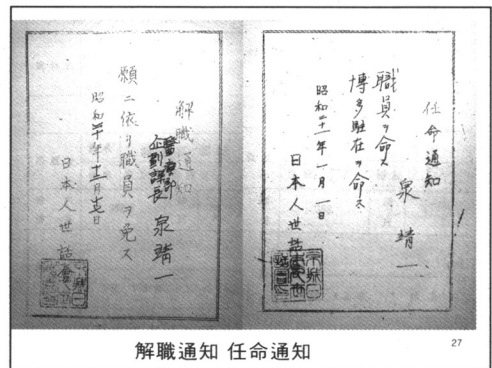
Slide 24

乗りました。この資料を集める時、聞き取り調査でこんなことを聞きました。ソウルから釜山まで列車が走る時ずっとトンネルがあります。列車がトンネルに入ったら動かない。そうしたらお金を準備して、その運転手に渡したら列車がやっと動き出したと。こんな悲惨な状況だったのです。だから、普通は出発したら次の日に到着する予定なのですが、長い時間では、ソウルから釜山まで5日かかった。スライドの左側はMRU医療チームです。その構成員はほとんどが京城帝国大学の医学部の先生たちなのです。

このスライドNo.27は泉靖一のことです。日本人世話会が医療部の企画課長泉靖一を昭和20年12月17日解職して、泉は18日に博多に到着します。つまり日本人世話会の組織から見れば彼は罷免ではなくて職場を博多に転勤したということです。博多の職場は昭和21年

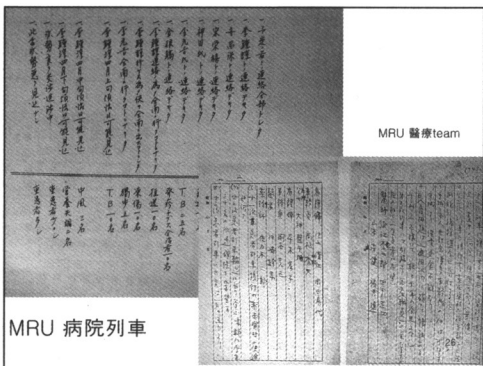


Slide 25

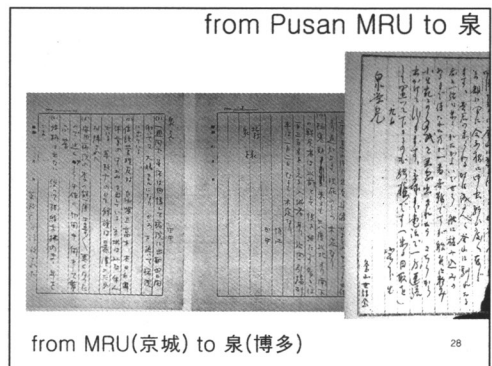


解職通知 任命通知

Slide 27



Slide 26



Slide 28

1月1日から仕事をして下さいということですので。

その後は京城に行ったMRU,釜山でもMRU組織としてMRU memberがありました。そこから博多の泉靖一の方に全部報告が来ます。スライドNo,28はその報告書です。

## 7、引揚げ者の帰国

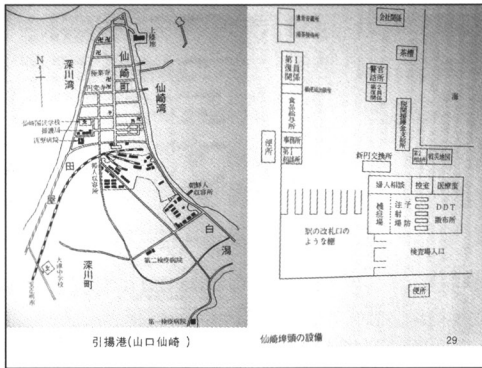
スライドNo,29は仙崎の港です。その当時の地図です。第一復員は陸軍関係です。第二復員は海軍です。戦後に日本政府は戦前の陸軍省、海軍省にあわせて第一復員省、第二復員省を作ります。

スライドNo,30の左側は引揚げ者一人のリュックサックに入ったものを何が何個あるかを全部チェックした物品明細書です。これに関する資料も随分残っています。福岡の福

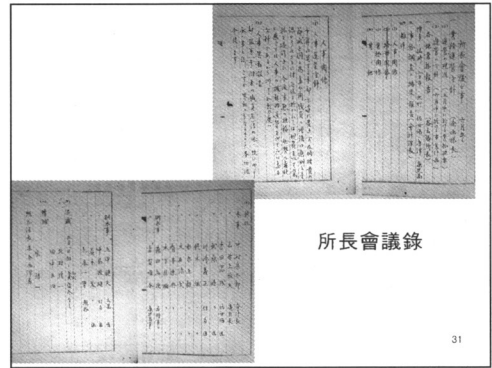
祉プラザに残されています。右側の写真は博多の引揚港の様子です。

博多の事務所調査で会議録とか誰が何の仕事をしたとか調べたら、名簿に載っているほとんどの人が京城帝国大学の人でした。スライドNo,31はその資料です。その時の所長は今村豊という京城帝国大学の解剖学研究室で体質人類学をやった人です。後には広島大学の解剖学教室、新潟、三重と移って行きます。いろいろな先生がいますがその中に北村精一という先生がいます。戦前は京城帝大病院の院長をやった人で、後には長崎大学で教えます。この中で一番重要な役割を持っていた人が泉靖一なのです。

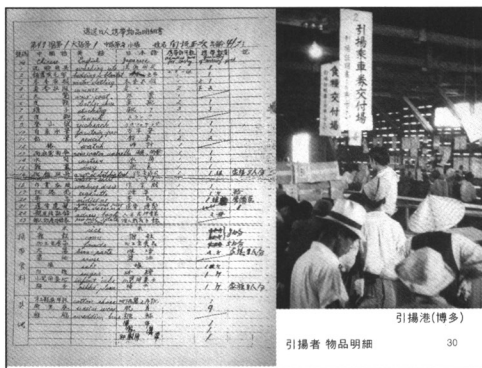
次のスライドNo,32も同じなのですが、例えば田中さん、今村部長、耳鼻科の須江先生です。田中さんは広島大学衛生学の教授になった先生です。



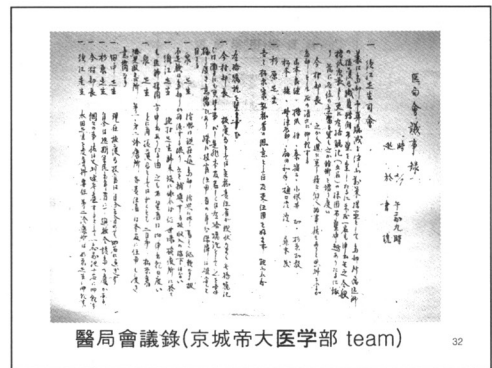
Slide 29



Slide 31



Slide 30



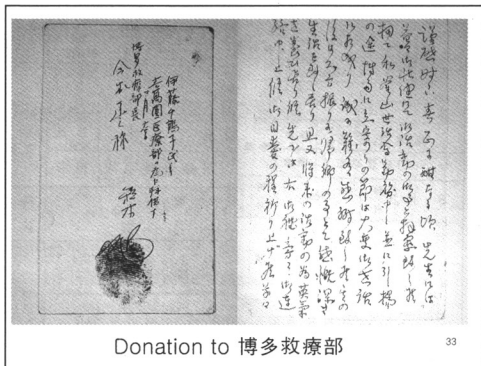
Slide 32

その時政府のもとに厚生省もありました。しかし厚生省から充分なお金が出ないので。孤児院などの活動にお金が必要ですが、それを寄付によってまかなうのです。スライドNo.33はそのドネーションの記録です。

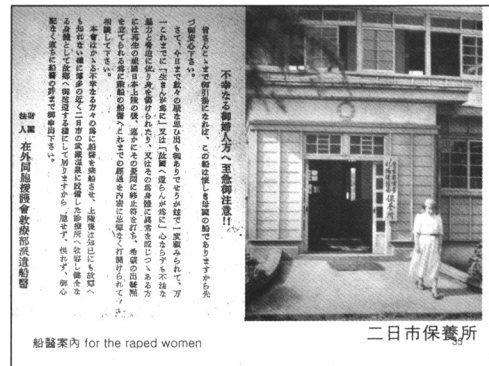
このスライドNo.34の左側は私が撮影したものです。右側は同じところを昔の写真集から複写したものです。博多にあります聖福寺です。聖福寺の住職のお母さんが、その時この中に設けられた診療所の看護婦さんでした。ですから、本当に詳しい情報が出たのです。

これからの話はショックを皆さんに与えるかもしれませんが。葫蘆島や釜山から出た船では博多に入る前に若い妊婦が海の中に身を投げました。自殺するのです。理由は殆どが満州からですが、満州や朝鮮半島から引揚げるときにレイプされたのです。その時大体18

歳から22歳くらいの年齢です。彼女たちは両親がいるふるさとに戻るところなのですが、不法に妊娠させられた身体ですから、両親の前へ行くことが難しい。そのために自殺するのです。それをみた京城の医師たちが引揚げの船と一緒に乗って「私たちが助けるから、自殺はやめてください」と説得したのです。スライドNo.35の左側が船内で配られた案内です。その時、墮胎は法律違反なのです。戦争にはたくさんの人が必要ですから、墮胎をしたら罰を受ける。法律上違法の状態なのですが、でもこの違法な妊娠の問題はどうすればいいのかという問題です。それで、福岡県の二日市に陸軍の保養所だったところを借りて病院をやります。墮胎病院なのです。普通は秘密病院や墮胎病院と呼ばれてテレビ番組や雑誌の中に取り上げられましたが、正式な名前はこのスライドNo.35の右側の通り



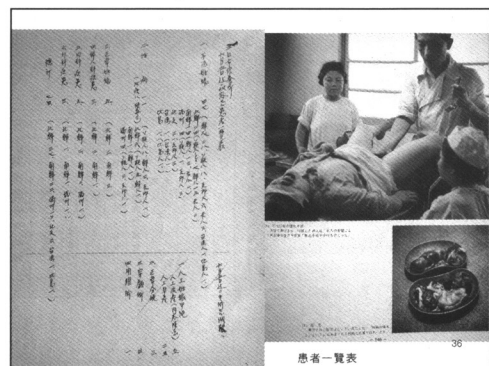
Slide 33



Slide 35



Slide 34

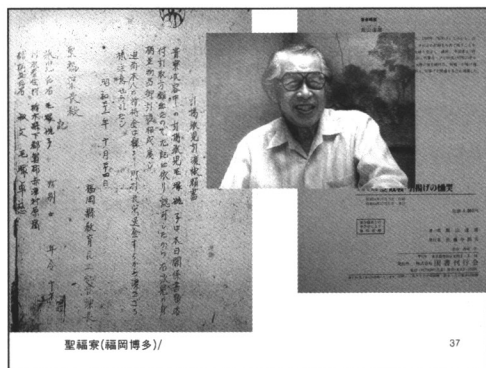


Slide 36

です。スライドNo,36がその時の手術場面の写真です。スライドNo,37はこの写真を撮った飯山達雄という人です。もともと朝鮮総督府鉄道局に広報係がありそこで仕事をしていました。泉靖一とは山登り仲間でした。その時、泉靖一が飯山達雄さんと呼んで、この日本人が経験する悲惨なことをちゃんと記録するべきだと言います。これが人類学者の精神なのです。これをちゃんと写真で記録して残して、次の段階の研究が出来る、そう言うのです。飯山さんは写真家として有名な人で、彼の写真は今、ネガフィルムで5000枚くらい、娘さんが保管しています。その手術をやるとき医者たちはこれは違法なのでやりたくないと言います。それを泉靖一が東京に行って何をしたか分からないのですが、ある日高松宮がこの二日市の病院を訪ねて、医者一人一人にご苦労さんと声を掛けます。この一言で、医師たちは不法なのだけれども手術を始めます。

このスライドNo,37の左側は孤児院の資料です。泉靖一は飯山達雄にお金を渡して多くの写真を撮らせませす。二日市の病院では医者の白衣を着てそのポケットにカメラを忍ばせ、あけた孔から写真を撮ったということです。飯山は葫蘆島まで行って写真を撮っています。

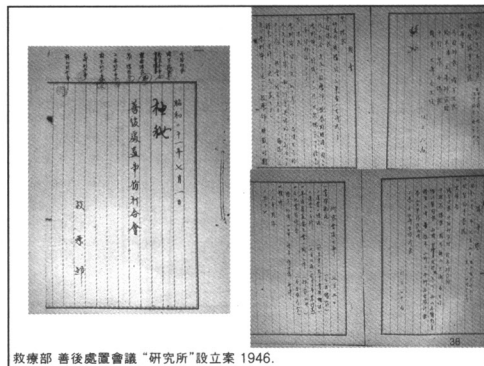
でも、その時、引き揚げ者の中の患者さん



Slide 37

たちを守ったその組織が臨時の組織ですから、その組織の仕事をした人たちの次をどうするかを心配します。秘密の会議を開いて組織をそのまま研究所にしようと思いますが、実際は出来ませんでした。スライドNo,38がその会議の資料です。もちろんこの組織の中心人物も泉靖一でした。結局、泉靖一は昭和22年東京の財団法人援護局の仕事に就き、東京に行きます。そして昭和23年には明治大学の社会学部の先生になります。

スライドNo,39の左側の写真が泉靖一です。今、この子ども糸江さんは福岡に健在だと聞いています。右側はその時泉さんが残した詩です。今、二日市に行ったらその碑があります。墮胎した赤ちゃんの霊のために碑があります。その横には京城帝国大学の卒業生がこんなことをやったということを意味する漢字一字を刻んだ碑があります。京城帝国大学同



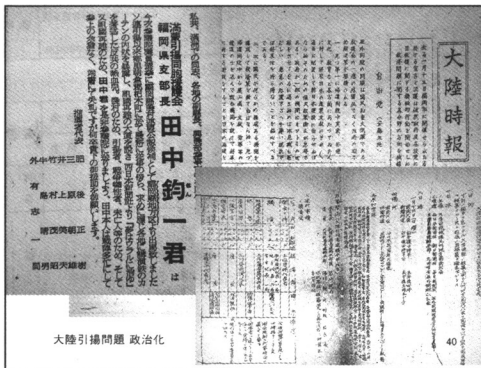
Slide 38



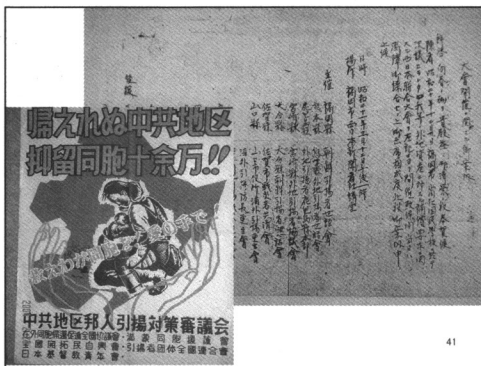
Slide 39

窓会が作ったものです。その病院の後も今残っています。

スライドNo.40を見てください。先に政治と満鉄のことをお話ししましたが、満州で発行された大陸時報という新聞がありました。この引揚げ問題が政治的な問題になります。今の中国残留孤児の問題もその流れの一つなのです。この後、ソ連に連れられていった日本人兵士たちはシベリアに全部連れられて行ったのです。その人たちのストーリーは今まで話してきたこととは内容的に違います。そのストーリーは舞鶴に引揚げ記念館があり、そこにシベリアの方に抑留された日本軍兵士たちの生活の資料がたくさんあるはずで、私はまだいったことがありませんので、これ以上は話せません。



Slide 40



Slide 41

## 8、引揚げ以後

引揚げの問題は1947年から8年間ずっと政治的な問題になります。あとは議員が出て、今までの引き揚げ者問題が遺族会という政治団体と深い関係になります。自民党の中に遺族会があるのはご存じだと思います。スライドNo.41の資料は中国に残された残留孤児のその前の段階を示すものです。抑留された日本人をどうするかという問題です。

スライドNo.42の左側は現在博多港にある記念碑、右は仙崎にある記念碑です。仙崎にある記念碑は引揚げのイメージとちょっと違うように思います。博多にある記念碑の前には朝鮮の平壤、満州の奉天、哈爾濱などにあった学校の同窓会が作った碑がありました。

スライドNo.43の右側の写真は仙崎にある観光案内所内の資料館のようなところで撮ったものです。私たちが案内してくれた安藤さんと私の妻が写っています。左側は博多であった引揚げ者会の様子です。そこに参加させてもらって、聞き取り調査をしました。現在は引揚げ者たちは80歳代です。だから今は彼たちの子どもや孫まで入った集まりです。自分の祖父、祖母のことについて知りたいという気持ちで集まっています。

スライドNo.44左側の名簿は興安会という組織のものです。満州の北方に大興安嶺とい



引揚記念塔(博多、仙崎)

Slide 42

う山があったのです。あのあたりを訪問するなど何か関係のあった人たちが作った組織です。その興安会の中には江上波夫など非常に偉い先生たちが入っています。勿論泉靖一も入っています。泉が1936年21歳の時、大学2年生の時にあの地域に生活するオロチョン族調査をおこなったのです。

今、私が時間があるときはいつもこの山口大学の東亜経済研究所の図書室に入って文書を読むのですが、すばらしい宝物がたくさんあります。中には戦前、中国と満州で出版された本、雑誌があります。これらは東京とか大阪にはないのです。それがある場所が山口大学なのです。その興安会に戻りますが、来月平成23年8月27日に最後の集まりが高野山で開かれます。その後は廃会となる予定です。ほとんどが亡くなっていて、お年寄りの人たちばかりですから集まるのが大変です。この会にも調査に行く予定です。

## 9、なぜ、引揚げ研究なのか

これまでスライドを中心に私の引揚げ研究の一部をお話してきましたが、この引揚げ研究は、今日本では誰もしていません。これはちょっと不思議だと思います。今私たちの生活を考えるとき過去を自分の鏡として見ること、過去を見て現在と将来の道を探すこ

とは生きる人間の正しい方法だと考えます。私はそう信じています。この引揚げという本当に戦争にだまされた苦痛、一般人たちのつらい悲惨な生活を忘れることはいけないのではないかと。現在の歴史的な関係をもってどうすれば再び研究することができるのか。その前段階として資料自体をちゃんと整理する必要がある。その過程の一部を今日紹介しました。

不十分な所とか、日本語で分からないところがあれば手を挙げて聞いてください。ないようなので、では自分で質問します。どうして韓国人が日本のことについて熱心に研究するのですか？

この理由は二つあります。

一つは泉靖一、この人の息子さんが現在京都大学にいます。考古学の先生で、来年退官予定です。5年前でしょうか、最初に彼を訪ねて、お父さんのことについて聞き取り調査したいと伝えました。最初は厳しい表情で自分は興味ないと仰いました。やはり親子関係は厳しい関係だと思います。それでも、今では私と本当にいい友達になって、その当時の日記とか全部見せてもらっています。日本の人類学、文化人類学を研究するときは必ずこの泉靖一を正面に置かなければなりません。その一部がこの引揚げなのです。

戦争途中、半年間ニューギニアにも入りま



Slide 43



Slide 44

した。戦後はアンデス、インカの発掘ばかり行いました。日本人として普通の人ではない。オロチョンにも行きました。行動を見たら日本人ではなくて韓国人に似ているのです。少年時代からずっとソウルで生活していて、韓国人の友達もたくさんいます。だから今、日本の人類学史を研究する途中も、これが私たちの問題点の一つなのです。私たちは人類学者として歴史研究をする時も人類学的にやります。聞き取り調査、文書調査だけでなく、お弟子さんたち、遺族に話を聞き、アルバムから様々なことを見出します。

私がこの研究をするもう一つの理由は、自分のおやじについて知りたいということです。私の父は今考えたら生活はほとんど日本人です。大正7年生まれで、9年前に85歳で亡くなりました。今私が日本の人類学という学問資料を勉強するために日本で生活をし、資料も見ながら、90歳80歳の自分の父と同年代の人と会って質問しながら、一緒に家に泊めてもらって、いろんなものを見、聞くときに自分の父のイメージが一瞬頭をよぎります。おやじについて知らなかったことが、少しずつ、少しずつわかってくるのです。

それはつまり植民地問題なのです。植民地ということは一度始まったら終わらないのです。絶対終わらない。今、私の孫がいますが、その孫はねんねこ子守歌でなければ寝付かない。この話も長くなりますからこのあたりで終わります。自分の家系の問題です。本当に自分が考えても深いんですね。自分で質問して自分で答えましたが、終わります。

## 後記

このChun Kyung-soo(全京秀) ソウル大学教授の講演は平成23年7月27日に山口大学文学部大講義室で開催されたものである。

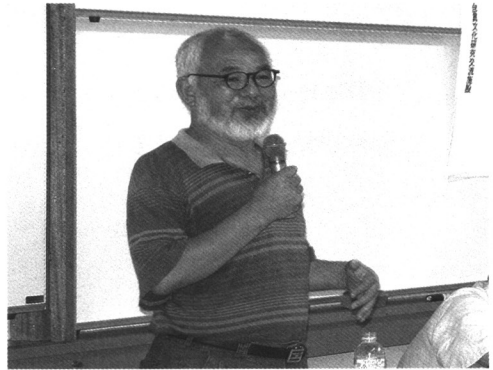
全京秀教授は東アジア研究科の外国人研究員として平成23年7月1日から9月30日まで山口大学に滞在された。その間大学院生及び学部生への授業とともにこの講演を引き受けて下さった。当日は学生及び教員あわせて150名ほどの参加があり、ほぼ一杯の階段教室で17時30分から1時間半、通訳無しの流ちょうな日本語での講演が行われた。

全先生は1949年生まれで、ソウル大学校文理科大学考古人類学に入学、同修士課程(人類学修士)を修了された。その後1978年から1982年までミネソタユニバーシティ大学院人類学科博士課程に在籍され、ph.Dの称号を得られた。1982年からソウル大学に社会科学大学人類学助教授として戻られる。1990年からは同教授に昇格された。1994年からは世界の大学の客員教授、特別研究員を歴任され現在に至っている。又、韓国文化人類学会会長、済州島学会会長、国際珍島学会会長、琉球沖縄学会会長を歴任されている。研究分野は人類学学史、生態人類学を中心としているが、これにこだわらない幅広い活動を展開されている。日本語で書かれた論文としては「植民地の帝国大学における人類学的研究：京城帝国大学と台北帝国大学の比較」[「<帝国>日本の学知シリーズ(3)』岩波書店(2006年)、韓国語の著書は『韓国文化論』(一志社)、『文化の理解』(一志社)、『環境親和の人類学』(一潮閣)、『糞は資源』(トンナム)等多数あり、日本語訳としては『韓国人類学の百年』風響社(2004年)がある。

講演は中国大陸、朝鮮半島からの戦後の引揚げについて、具体的にどのように、またどんな組織のもとで行われたかを丁寧な資料紹介の形をとりながら話が進んだ。並行して人類学者泉靖一が引揚げを進める中心的人物であったことが語られる。

泉靖一は日本の人類学の草創期の学者とし

て、東京大学での南アメリカ研究者として知られた人であったが、朝鮮半島時代のことは殆ど知られていなかったといえる。この講演は戦前からの中国、朝鮮半島の人類学の活動を伝える内容でもあった。終了後の学生のコメントからは、身近な問題なのにその内実が初めて分かったとか、親戚に引揚げの人がいるので話しを聞いてみるなど、具体的な問題として理解しているようであった。また、丹念に資料を積み上げ事実を明らかにしていく文化人類学の方法を改めて理解したという内容のコメントも少なくなかった。改めて日本語での講演依頼を快く受けていただき、ていねいなプレゼンテーションとともに高度な内容を分かりやすく話してくださった全教授に感謝したい。また、全教授は山口大学東アジア研究科外国人研究員として3ヶ月滞在され



講演会風景

たが、その殆どを学内施設である東亜経済研究所に入り、一つ一つ文献を手取る時間として費やされた。そして、何度となくその蔵書の大切さを私たち教員や学生に語られたことを最後に書きとどめておきたい。

(担当 坪郷英彦)